３．ヘルスコミュニケーションウィーク 2022 名古屋 第 14 回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会報告

阿部恵子
同大会長、金城学院大学看護学部看護学科基礎看護学

2022 年 2 月に発足したヘルスコミュニケーション学関連学会機構を母体とした７つの分科会が一堂に会するヘルスコミュニケーションウィーク 2022 名古屋の学術集会が金城学院大学にて 2022 年 10 月 1 日から 2 日に開催されました。これまでは日本ヘルスコミュニケーション学会が親学会として位置づけられておりましたが、ヘルスコミュニケーション学関連学会機構が組織化されたことで、本学会も分科会の１つに位置づけられることとなりました。そしてこの度、第 14 回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会の大会長を務めさせていただけましたことは大変名誉なことであり、このような機会を与えてくださいましたことに感謝申し上げます。

今回の日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会のテーマを「今こそ『人』が繋ぐヘルスコミュニケーション：アートのこころをどう伝え、受け取るか」とし、シンポジウムを２つ企画しました。インターネットによる情報伝達の高速化、大量化、また， Twitter、YouTube などの SNS が若者を中心とした社会の情報共有の主ツールとなったニューノーマル時代は、便利さを享受する一方で、その分かりやすさ、正確性、信頼性が重要な課題となっています。そのような状況の中、シンポジウム１では対人系のヘルスコミュニケーション、シンポジウム２ではメディア系のヘルスコミュニケーションを取り上げ、アートを切り口とした発表を組み立てました。

シンポジウム１は、「市民参加のコミュニケーション：アートの心をどう伝えるか」をテーマとして、アートを通して、学習者の感情や感性に働きかける教育を実践されている 3 名の先生方にご登壇いただきました。まず初めに、長年共感の研究をされている鳥取大学の孫大輔先生に「アートは医療者教育にどう役立つか：共感とナラティブ・コンピテンスを養うためのアート基盤型教育の可能性」についてご講演いただき、共感を育むアートに基づいた教育の方法論を概説していただきました。次に、市民参加による多職種連携教育を多く実践されている名古屋大学の末松三奈先生に、「学生は模擬患者及び市民参加の多職種連携教育から何を感じ・気づくか」について、それらの実践から学生の気づきや学びを発表していただきました。３人目は、NPO 法人スピーカーバンクを設立して自らの患者体験を語る活動を行っている東京大学の香川由美先生に「医学生の患者への共感を育むための患者の語り（Patient Storytelling）の活用」について、患者講師を迎え、実際の講義のように患者の語りを交えて共感を育む講演をしていただきました。これら３名のご講演を通して、患者の価値観やアートに触れ、内省と思考する事による情動的な心の揺さぶりから真の共感や感性が生まれることが理解できました。

シンポジウム２では、「市民・患者に向けた『ヘルスライティング』のアートと科学」をテーマとして、文字媒体を通して、情報をわかりやすく伝え、健康行動につなげるヘルスライティングについて、患者、医療者、メディアの視点から３名の先生方にご講演いただきました。まず初めに、行動変容のためのヘルスコミュニケーションを研究されている東京大学の奥原剛先生に、「保健医療の専門家から市民に向けたヘルスライティング」と題して、ヘルスライティング研修の紹介とヘルスライターに求められるコンピテンシーについてご講演いただきました。次に、がん患者に関する情報作成に長年携わってこられた国立がん研究センターの高山智子先生に「保健医療の専門家から患者に向けたヘルスライティング」と題して、その人のより良い意思決定の支援となる情報を提供するためのスキルや情報をどう固めるかのバランス感覚などをご講演いただきました。最後に、帝京大学大学院の小川留奈先生に「メディアから市民・患者に向けたヘルスライティング」と題し、書き手、読み手、媒体も多様な状況で、ヘルスライティングの土台となる知識、スキル、価値観を共有した上で、書き手個人のセンスや倫理観のみに頼るのではなく、正確性を維持しながら媒体や読み手に合わせる柔軟さが必要と指摘されました。これら医療者やメディアから市民・患者への文字媒体による情報発信は、知識やスキルだけではなく、両者の価値観やその理解など、アートの部分が重要であることが議論されました。

２つのシンポジウムを通して、対人によるコミュニケーションであっても文字媒体による情報であっても、対象者の価値観を理解し、感性に働きかけるコミュニケーションが求められているという点で共通していました。今後、ヘルスコミュニケーションにおいて、ナラティブ的な個人の内的世界を探求するアートの重要性理解に繋がるのではないかと期待しています。